

私は南朝鮮の光州師団歩兵補充隊に転属した。

ここで終戦を迎え、無事に博多に上陸し、昭和二十一年十一月四日故郷に帰った。

五 結び

東部ニューギニアの戦争では約十四万人が参戦し、そのうち十一万人の多数の戦死・傷・病死者を出し、生還したのは約三万人といわれている。私は幸運にもこの少数の生還者の一人であり、負傷箇所も治り、戦後平和日本の復興に一役を尽くし、長年勤めた会社も無事に定年を迎えることができた。

然し約五十年を経過したいまでも、臉に浮ぶ戦場の一駒があり、一日たりとも忘却したことはない。

遠く離れた南の島、灼熱の戦場で敵の銃弾に倒れ、飢餓や病魔と闘い、祖国日本の勝利を願う信じ、謳歌すべき青春も知らず、あるいは恋人を、また妻子や両親を故国に残し、平和日本の礎となり戦場の露と消え、戦没した幾多の英霊に対し、感謝の念を捧げ、朝夕仏壇に向い献灯し、香を焚き、ひたすらお静かにお眠り下さいと冥福を祈ることを私に残された余生の勤めと

し、元気で頑張っています。

戦争とうた

東京都 下川 武夫

「歌は世につれ、世は歌につれ」というが、どんな歌でも人の胸をうち、心に残る歌はよいものである。

あの日、あの時の映像が郷愁のなかに甦る。そして時には大きな力をもつものである。特に戦争という極限の状態のなかでうたった歌はなつかしく、ともすれば歴史の彼方に埋没しようとする思い出を呼びもどしてくれる。これはいつの時代でも生死の境を歩む人間の赤裸々な姿の叫びであり、皆共通したものがあつたらうと思う。

北支の大行山脈で見た月、ニューギニアの海岸線で椰子の葉陰でみた月。砲煙くすぶるなかで、ところ変われど、情趣豊かなものがあり、ひととき生きている味をかみしめながら、戦友と共にうたい、励まし、慰

めあったものだ。因みに北支では「大黄河」「開封小唄」「霸王城」「勸太郎月夜」などがよく唄われた。

ニューギニアのマノクワリでは将兵の士気を鼓舞する目的で、連日の激しい爆撃などをうけながら、寄せ集めの材料でマノクワリ歌舞伎座が建てられ、いまは故人となった俳優の加東大介さんらの演芸分隊が生まれ、ここで「南の島に雪が降る」の名場面が生まれた。この芝居をみるために、各地から傷ついた戦友を背負い、また担架に乗せて川を渡り、ジャングルを抜けてこの劇場にたどりついて、舞台の紙吹雪を拾いながら大粒の涙を流したのである。とくに東北方面の出身者の感激はひとしおだった。

この入場券は自作のサツマイモで、イモの豊富な部隊はそれなりのおぼしめし、少ない部隊はロハだった。

「浅草の灯」「長崎物語」「ラバウル小唄」「誰か故郷を思わざる」などが唄われたのはこの頃である。

戦局の状況は悪化し、ヌンホル、ピアク島が玉碎し、いよいよマノクワリにも敵が上陸するというので、最後の自爆用の手榴弾をもち、主食のサツマイモをはじ

め、トカゲ、ヘビ、カメなど食べられるものはなんでも食べた。そしてマラリヤ、下痢にも襲われた。

「こんな生きざまを親、兄弟、女房にもみせられんなア」「死ぬ前に一食でもいいから……白い飯で豆腐の味噌汁に沢庵が食べられたらなア……」。戦友同志のこんなつぶやきも冷酷非情な戦場では無残な空しい夢であった。激しい爆撃、銃撃などで戦友はバタバタ倒れて逝った。

ジャングル特有の陰湿な中での戦場生活を少しでも明るくさせてくれたのは歌である。「きょうか？あすか？どうせ死ぬんだ」こんな諦命観めいたもので、ひらきなおって数えきれないほど生死のはざまをきりぬけた体験は生きる自信を強くした。まさに紙一重の人生だと思った。戦友同志でさまざまの歌をうたい、また聞きながら終戦を迎えたのである。

移動前にかつての兵舎に行ってみた。その兵舎は朽ち果て、鉄カブトや錆びついた帯剣などが散乱していた。いまは亡き戦友がそこかしこに、一人ひとり生けるがごとく語りかけているようにみえた。そして戦友

が元気な時にうたったあの声が、ジャンゲルの中に余韻を残しながら吸いこまれてゆくようだった。

とめどなく頬を伝わる涙は、万感胸に迫り、栄養失調で衰えたわが瘦躯に複雑な感情が交錯した。さまざまに思い出をこめた兵舎を何度か振り返りながら別れをつげたのである。

かつて戦友の加東大介さんが元気なころ、東京・日本橋あたりでよく盃をかわしたが、あのニューギニア時代の話にふれると「われわれにとってサツマイモは命の恩人であり、この味は忘れない。あの時うたった歌も絶対に忘れない」と述懐し、これからもあの時を想起してガンバローとお互いに励まし合ったが、その加東大介さんも今はもういない。

中国大陸にまた南方の島々にあつてひたすら祖国のために戦つて散華した多くの戦友は、現在の日本の平和と繁栄をみつめながら、どんな気持ちでいまの歌を聞いていることだろうか。また靖国神社でたずねてみたいと思う。